

存分に格闘すること

審査委員長 中西進（田辺聖子文学館館長
高志の国文学館館長）

若いころと違って、すっかり怠け者になってしまつて、近ごろは小説をあまり熱心に読まなくなつた。

それでいて不遜にも、小説がおもしろくなくなつて、もう興味が湧かないなどと、ばりばりと活躍している現代小説の担い手には読まれたら困るせりふを、こっそり呟いてしまう。

歴史小説は、あの鵬外の歴史そのままと歴史はなれがうそのように、ほとんど再話、再再話にすぎないよう思うし、現代物はミステリーまがい、小器用な物しか目に入らない。

そんな中でわたしは頑固に古風に、思想を探しまわり、観察の鋭さなどに感動したがつている。やはり、きわ立つた創造性があつて、凡慮の及びがたい宇宙に、感応したい。

そう思うのは、文学に目覚め、その表現者になりたがつている若者にも、現代の文学の傾向が、当然染み込んでいるだろうと思うからである。手本とされる（いや、勝手にされてしまう）人気作家の負担は、いつも自然に重くなつてはいるはずだ。

私たちのジュニア文学賞も、その例外ではない。もう少し、堂々と勝負を挑むものがほしい。いかにも文学めいた幻影とか、陰画のような非在感とか、もつといえればあえて辻褃の合わない道筋とか、そんなものを文学だと錯覚しているような傾向がもしあれば、申訳ないが、これは大人のせいだとわたしたち門外漢は勝手に決めつけて、がっかりする。

若者賞をレベルアップさせる手段は、大人が大きく腹をくくつたような世界を、進んで見せるしかないのではないか。

わたし個人でいえば、いま比較的多く、長編小説を読む機会に恵まれている。その読書のたびに、一編一編、期待を込めて向き合う。

そのジュニア版としてジュニア賞を受けとめていきたいという熱い思いを、捨てないでいたい。中・高校生諸君に言えば、存分に文学と格闘することが、たった一つ飽満な時代にあつてのとるべき自律の道ではないかと思うのである。